

腸内細菌が肥満指数や善玉コレステロール値と関連

腸内細菌叢は、腸内に自然に存在する膨大な数の細菌や微生物である。宿主と細菌の相互作用で免疫や代謝の機能が制御され、心臓血管病の発症とも関係することが示されている。しかしながら、ヒトを対象とした大規模試験によるエビデンスはなく、とくに心臓血管病と血中脂質値の異常との関連については確固たるエビデンスはない。本研究では、肥満指数（BMI）や血中脂質値と腸内細菌との関連について検討した。

18歳から80歳のオランダ人893人を対象に便検体を分析し、腸内細菌叢を調べたところ、BMI、血中脂質と関連する34種類の細菌が同定された。統計学的解析により、BMIのばらつきの4.5%、トリグリセリド値の6%、善玉コレステロール値（HDL）の4%が腸内細菌叢により説明がつくことが示された。一方で、悪玉コレステロール（LDL）や総コレステロールに対しては、腸内細菌叢の影響はほとんどなかった。

したがって、腸内細菌叢がBMIや血中脂質値の変動に重要な役割を果たしていることが示唆された。

出典：Circulation Research. Published online Sep 10, 2015;

doi: 10.1161 / CIRCRESAHA. 115. 306807